



92年のパリサロンでデビューして、昨年から生産開始となったルノー・トゥインゴが、いま平安遷都1200年で盛り上がろうとしている京都に出現したの図。

92年のパリサロンでデビューして、昨年から生産開始となったルノー・トゥインゴが、いま平安遷都1200年で盛り上がり上げようとしている京都に出現したの図。



早朝、トラックでいっぱいの東名高速道路を西へむかう。3つ並んだグリーンのダイヤルのうち、右端がブローアーのスイッチだが、弱と強の2段階しかない。

非力なフランス車

闇に包まれながらダルマさんに乗つていると感じる。私の進行方向を指示してくれるのは、ヘッドライトというよりは、スカットルの上の運転席と助手席の真ん中で光っている、一つ目オバケみたいなデジタル式スピードメーターだ。

けれども、こうやって東名高速道路を走つてみると、120km/h巡航はラクラクで、室内もなかなか静か、スタビリティは十分で、乗り心地はうねりがあつたりすると、フワフワとソフトで心地よい。凸面の頂上から降りる時のフワーンという感覚が、「お、フランス車らしいな」と思うのである。驚くべきことに80km/h巡航はかなり静かだ。だが、120km/hでは音が少々こもって、ボリュームというよりは周波数を上げないと、助手席との会話を聞き取りにくい。

路面の繋ぎ目や穴ボコのような段差では、やっぱり思わず突き上げを感じる。サスペンションはあんまりストロークせず、ボディはやっぱりヤワっぽいのだ。ここらへんはむかしのルノー・サンクなんかのほうがよかつた……、と思わせるところだ。だが、むかしのサンクはもうむかしのサンクであつて、それはその後のシユペール・サンクやルーテシアも既にむかしのサンクではないのである。いまのトゥインゴはいまのトゥインゴであつて、

むかしはトゥインゴはないのだ。

120km/hぐらいで大井松田近辺の坂道を上つていたら、みるみる速度が落ちていく。ペタ踏み状態で、なんとカー100km/hをキープ。床に押しつけている自分の右足の存在を感じつつ、考えてみると、こういう気持ちになることはじつに久しぶりだなあとと思う。

ドライバーの目の前にスピードメーターはないし、フロントノーズはまったく見えない。だから、日の出前の闇の中では、ステアリング・ホイールの周辺から既に真っ暗で、私は坂道でみるとみる速度が落ちるようなクルマに、僕は最近乗っていない。

ああ、私はいま、非力なフランス車に乗っている……と、ウレシクなる。だから、私は味なシフトダウンの好きな私が5速のまま、ただ右端のペダルを踏みつけるのだった。そして、高速道路上などと問題のない速度をキープしながら、トゥインゴは坂を上り続ける。傾斜が緩やかになったことは、トワインゴがゆっくりながら加速を始ることで理解される。

ダルマさんの中で

1

京都でトゥインゴどす

遷都1200年を祝う古都にルノーの革命的小型車で行ってみた

ルノー・トゥインゴが、京都のアルファ専門店、ホリトレーディングの手によって上陸した。ディーラーがなくても、こうした草の根の動きで、待ち望まれる外車の輸入が積極的に行われるのが現代ニッポンなのである。

文=今尾直樹(本誌) 写真=小川義文



タコメーターがないから、本当のところはよくわからないが、少なくとも2速で80km/h、

3速で120km/h、4速で150km/hあたりでは伸びることは、大雑把に変わらずジタル・メーターで確認済みだ。トップから4速、場合によっては3速に落として、OHV

4気筒を猛然と鳴らせれば古典的なドライブングの喜び——すなわちノイズとバイブレーションの世界が待っている。

そうした時でもトウイングはけっして野蛮ではない。あくまで、おつとりと、ホンワカ、

め、やがて色を取り戻して、見慣れた御殿場

近辺の風景を私は発見する。

今日は快晴である。7時頃、日本平サービ

スエリアで、納豆とタマゴと煮魚と、はんに味噌汁を食べて再スタートしようと、初めて明るい太陽の下に併むウルトラマリン・ブルーのトウイングをマジマジと見た。カワイイ。

私はトウイングに近づいていくのが、なんとなく嬉しかった。1・2mの小さなクルマに近づいていくことを誇らしく思った。パリで乗るよりも明らかにトウイングが輝いて見えるのは、ここがフランスではなくて、ニッポンだからにはかならない。

一説によると、トウイングの開発にあたってはルノーのデザイン・チームが采田日し、東京に長期滞在、いたく初代ホンダ・トウディが気に入り、本国に持ち帰り、徹底的に研究したのだという。

日頃サルマネ日本人と言われている私たちだが、ついにフランス人がマネするような時代になったのである!

というようなコトをいう人もいるけれど、たとえ、そのような事実があつたとしても、トウイングのカタチはオリジナルのトウディよりもさらにトウディのコンセプトに踏み込み、さらに先鋭的に仕立て上げられていて、ここまでやればヨカッタのに、という見本になつていてるように私は思われるし、トウディとは似て非なるモノに私は見えるのであつた。同じ小型自動車ではあるが。

いったい私たちサルマネ日本人が、デザインにおいてオリジナルよりもオリジナルに見えるサルマネをしたことがあるだろうか?

これは似て非なるモノに私は見えるのであつた。同じトウイングではあるが。

京都東インターを降りたのは11時40分だった。東京を5時に出発してから、7時間近くかかることがある。ちなみに高速巡航燃費は、海老名～多賀サービスエリア間で13・7

km/h巡航は285km/hとなる。

トウディとは似て非なるモノ?

足柄付近を走っている頃、世界が白みはじ

3

舞妓はんの謎

4

どつしりとしている。おつとりとした時の流れがまた、夜明け前にダルマさんを彷彿させたのだろう。ちなみに、カタログによれば、トップの1000rpmは35・07km/h。計算上の100km/h巡航は285km/hとなる。

舞妓はんの謎

京都東インターを降りたのは11時40分だった。東京を5時に出発してから、7時間近くかかることがある。ちなみに高速巡航燃費は、海老名～多賀サービスエリア間で13・7

km/h巡航は285km/hとなる。

これは「舞妓さん」に変身!!

京都旅行に思い

到着した3組目の舞妓はんで、やっぱり

言も口を聞かなかつた。話しかけても、う

なずくだけなのである。

もし話すとなると、「写真ですか。へえ、

よろしう。これはルノー・トウイングですか?

えらいカワイおすくな」というような京都弁

を使わなければいけんからであると思われる。

彼たちはしゃべらないことで、舞妓はん!!

自分以外のひとになりきつているのである。

舞妓はんの謎

舞